

---

RED ~ DISTINY ~

TAKEO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

RED                    ↳DISTINNY

### 【Nコード】

N2425I

### 【作者名】

TAKEO

### 【あらすじ】

高校生活の日常の中で出逢う運命にあった3人。

主人公ヒロと親友シゲ

そして「サキ」

今、3人のそれぞれの運命が重なり合おうとしていた。

## 一章 プロローグ

もう、どれくらいになるだろう？

恋なんてもう忘れたはずだった。

そう、君にまた出逢うまでは・・・

僕のなまえは、ヒロ・・・

そう、あの時からきつと恋をしていたんだ。

「おい。シゲそっちに球いった？」

「んー。来てないけど・・・。」

「おかしいな。そっちにいったはずなんだけど・・・。」

そんなには、広くないグラウンドなのに、球が見つからない。  
辺りは、放課後のグラウンドで、まばらに生徒が散らばっていた。

「まあ、いいや。」

「そろそろ日も暮れてきたから、帰ろうや。」

「ああ。」

そう僕は、頷いて校舎に向かって二人は歩いて行った。

二人は、教室に戻った。

教室の窓には、少し恥ずかしげに夕日が差し込んでいた。

「なーヒロ。」

「んっ？」

「あの球どこいったんだろっな？普通なくならないよな。こんな狭いグラウンドじゃ。」

「そうだよな、どうして無いのかな？」

「まあ、いいや。悪い今日ちよつと用事あるんだ。先、帰るわ。」  
と云ってシゲは、小走りしながら帰っていった。

僕も、帰り仕度を済ませて、教室から廊下の上履きを引きずりながら出て行くと、さっきまで淡いオレンジ色の夕日が濃く強くなっていた。

下駄箱で靴を履き替え、外に出ようとすると……。

「あのーすいません。この球……違いますか？」

オレンジに染まった昇降口の中の小さな影……

……一瞬体に電気が走った。

それは、あまりに濃くて大きな夕日が、少し逆光気味に君を照らしていたからかもしれない。

綺麗に整った長い髪。

オレンジに染まった白い肌。

そう……それが、君……

「サキ」との初めての出逢いだった。

少しの間、見とれていた。

その一瞬が永遠のように思えた。

僕は、そんなことを気取られないように、「あっ、サンキュー。探してたんだ。」  
と云った。

と、たどたどしい僕を横目に・・・

「あのー私。3組なんですけど、7組ですよね？今度よろしくお願  
いします。」

「?????」

「今度文化祭で、3組と7組共同で制作があるでしょ?」

正直、学校行事のことなんて気にしていなかった。

「あっ。あーそうだね。よろしく。」

僕は、気づくと軽く口裏を合わせていた。

彼女は、自然な微笑みを浮かべながら「はいっ」と僕の右手に、無  
くしていたはずの球を手渡した。

「ありがとう」

そう云うのが精いっぱい僕の反抗だった。

翌日

いつもの様に退屈な授業を聞ききながら、少しうつむいていると、  
後ろのほうから丸まった紙が飛んできて、見事に頭に命中した。

シゲがこっちに口パクで、「て・・・が・み」と云った。

手紙には、「今度、文化祭出し物何にする？」と書いてあった。

そういえば、今日の5限目のHR3組との共同で出し物を決定すると、担任のホンコン先生が云っていたのを思い出した。

そういえば、昨日の子、名前すら聞いていなかった。

僕は、心を躍らせた。

## 5 限目

2組の生徒が教室に入りきらないので、3階の講堂へ移動する途中。

「なーヒロ。ナカムラっていう女子知ってる？」

僕は、「顔見れば分かるかもしれないけど、3組は階が違うから多分、知らないと思う。」と答えた。

更に、シゲの話は続く。

「すんげーかわいいんだよ。少しぐらい話せるかなー？スタイルも良いしなー。」

なんか、シゲは相変わらず調子よくしゃべりたてていた。

2人揃って一番後ろの席に着く。

「シゲってそういえば、アキと別れた後、新しい彼女出来たんじゃないの？」と僕が聞くと。

「駄目なんだな〜わがままで・・・あれは、別れたよ。」と答えた。

「女でとばっちりは、もう、マジでほんと勘弁だからね。頼むぜ」

この間まで、2人して凹んでいたのに……。  
親友ながら、ほんとに軽いヤツだ。

「折角、協力してあげて付き合えたのに……あんなことになって・  
」

「まあヒロのせいでもあるんだから、もうその話はなしね」  
……マジ。  
まあいいか。

こんなやつでも気が合うのが、自分でも不思議でしょうがない。

……。  
「隣座りまーす」  
と女子が半ば強引に座ってきた。

彼女は、僕の顔を下から覗きこんで、「昨日は、どうも」と明るく  
微笑んだ。  
僕は、まともにも目も見れずに頷いた。

「おっおい。あの子話したことあるの？」  
シゲが小声で話しかけてきた。  
「ナカムラ サキ。さっき話した、ナカムラだよ」

……ナカムラ……サキ。

そう……  
ここからが、全ての始まりだった……。

## 2章 シゲ

### 2章 シゲ

「もうダメ。人が来るって！」

「大丈夫だよ」

「だから、ダメだって……」

駐輪場の影で、2人は静かに息を殺しながら絡みあっていた。

「ガタッ」

「まずいよ、誰か来たよ」

7

……「シー」

静かにシゲは、女の唇を器用に左手で塞いだ。

「たまらねえな、まいった」

そう云うとシゲは、おもむろに学生服のズボンを上げ、ベルトを締め始めた。

「アキ、つづきは今度な」

「うん」



シゲ、は自他共に認めるハンターだ。  
スラツと高い背に端正な顔立ち、俗に言うモテ男だ。

携帯には、常にヤレル女のリストがあるようなどうしようもないヤツ。

そんな感じだ。

高校1年の時に、同じクラスになったのが知り合ったきっかけだった。

ものの1カ月で、親友と恥ずかしげもなくお互いを呼べるくらいに仲良くなり、いつしか行動を常に一緒にするようになった。

「なあーヒロ」

「んっ？」

「ヒロと同中のアキちゃんっているじゃん。彼女可愛いよな。」  
俺、アキちゃんのこと気になるんだけど」

「そっか」

「そっかじゃなくて、それでだろ？」

「じゃあ、それで？」

「おまえアキちゃんと友達じゃん。ちゃんと紹介してくれない？」  
「変なこととかしない？」

「お前がアキちゃんと友達だから、俺も友達になりたいんだよ」

「そっか、じゃマツク奢る？」

「奢りますから」

「しょうがねーな。わかった」

僕は知らずにいた。

アキの気持ちも、シゲの考えかたも・・・

今考えれば、この辺からシゲと僕の運命が絡み始めたんだ。

結局、中学の頃からの友達「アキ」をシゲに紹介することにした。

アキとは、中学からの同級生でなんとなく知っている間柄としての友人だった。

まんざらでもないアキを横目に僕は、静かに2人の前を立ち去った。

・・・と、アキがこちらに気を使い大きく手を振った。

暫くして・・・

「マジ、感謝、感謝だよ。ありがとな。付き合えたのヒロのお陰だよ」

そうシゲは嬉しそうにはしゃいでいる。

アキとシゲは付き合うことになった。

「……………」（あいかわらず、手の早いヤツだ。）

「アキの事・・・泣かすなよ」ドラマのように云ってみた。

本当になんでだろう、アキの事も、シゲの事も・・・考えたくもない。その後悔することを、この時、知る由もなかったんだ。

その当時はあまり知らなかったが、シゲが中学の時、親父さんを亡くしている。

工場を経営していたのだが、なんかの保証人になり負債を抱え、それを苦にした自殺らしい。

・・・なんか人懐っこい性格は、そのせいかも知れない。

ほんとに変な奴、憎めない奴って感じた。

今でも、そんな風に思っている。

それから3カ月くらい経ったある日。

その日は確か結構な雨が降っていた・・・。

それだけは覚えている。

雨で誰もいないはずの校舎の屋上に、アキとシゲが深刻そうな表情で話している姿が見えた。

アキは、シゲの手をはね退け足早に屋上から廊下へと走って行った。

僕は、戻ったシゲに「どうした？」と聞くと。

「ああ、ちよっとね。少しトラブった」と下を向いて云った。

シゲは、うつむきながら「いつもの事さ」とそう云うだけだった。

その、2日後くらいだろうか？

僕は、アキに呼び出された。

この間の雨が嘘だったかのように、まぶしい光が差し込む・・・そんな日だった。

「あのね」

「ん？」

「あのね、・・・実は妊娠したみたいなの」

「えっ？」

アキは、涙をうかべながら僕に、云っている。

「・・・」

暫く、沈黙が続いていた。

「・・・それ、シゲは知ってるの？」

「・・・」

彼女は、無言で首を縦に振った。

「知っているのか？」

彼女は、静かに頷いた。

こんな時、ドラマなら「産めよ」とか「大丈夫なんとかなる」とか云うのだろうけど、僕は、ただ・・・只、拳を握りしめ、下を向き、聞いているだけだった。

帰宅した僕は、シゲを呼び出そうと、携帯を鳴らした。

・・・RRR

・・・RR

・・・

「もしもし？」

「シゲ？」

「ああ、ヒロか。どした？」

「少し時間ある？」

「ごめん、今、バイト中。明日学校でもいい？」

「・・・ああ、わかった」

「ガチャ」

出鼻をくじかれた様に僕は、うなだれるだけだった。

「ねー今の誰？」

「高校の友達」

「ふーん」

「こんな時に電話なんて・・・もう少しでイケそうなのに。まあいいや」

「初めから、やりなおし〜」

「ちょっと・・・っ・・・うっ・・・あっ・・・あ」

ヒロ

「おーヒロ。おはぢぢっ」

「・・・おはよう」

「・・・」

「シゲ。アキ、子供出来たらしいぜ」

「ああ」

「ああじゃなくて、どうするんだよ!」

「・・・墮ろすしかないね」

「なんでそんなこと簡単に云えるんだよ!」

「他にどうしろって云うんだよ。だって、アキ・・・お前が好きなんだぜ。どうしようもできないじゃないか!」

全然気付かなかった。

いや、気付かなかった。

アキのこと、シゲのこと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2425i/>

---

RED ~ DISTINY ~

2010年10月14日16時47分発行